

ズリと手持ちヘラケズリがあり、前者が多い。四次床面はヘラ切りと静止糸切り、再調整の回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリがほぼ同数ある。六次床面は静止糸切りののち手持ちヘラケズリが主体を占め、他に静止糸切り＋回転ヘラケズリ、静止糸切り無調整、ヘラ切り＋回転ヘラケズリがある。したがって、主体となる技法が切離しがヘラ切りから静止糸切りへ、再調整は回転ケズリから手持ちケズリへと移行・変化していることがわかる（古川・太田：1993）。また、ケズリの施される部位が体部下端から底部周縁主体（二次床面、四次床面、六次床面の焼台）→底部周縁主体（六次床面の製品）へと変化しており、仕上げの簡略化の傾向がうかがえる。

高台壺は台部が高さ1cm前後と低く、直立気味で断面方形のものと「ハ」字状に開くものとがあり、前者が多い。壺蓋は器高が低く全体に扁平なものが主体を占める。つまみはリング状、宝珠形、扁平な宝珠形がある。特にリング状つまみはこの時期に盛行し、他ではあまりみられない。窯によっては出土したつまみすべてがリングのところもある（下伊場野A3窯、鳥屋三角田南1・2窯）。つまみがリング状や宝珠形のものは口縁端部が丸くおさまるものや短く折れるものが主体を占め、他に口縁部内面に小さなカエリが付くものがある。これに対し、つまみが擬宝珠形のものは口縁端部が直角に折れ曲がっており、つまみの種類によって口縁部形態が異なる。甕は口径が30cmを超える大形のものと20cm台の小形のものがあり、前者の頸部には櫛描き波状文が施されるものが多い。

こうした中で萱刈場A地点SR2・3窯跡の須恵器をみると、双方とも壺は皿形が主体であり、切離し・再調整技法のあり方がSR2では静止糸切りと手持ちヘラケズリが主体を占め、SR3でも4割を占めている。また、壺内面の立ち上がり部にヘラ状工具があてられ、その部分が沈線状になるものが多い。こうした特徴は日の出山窯跡群A地点8号窯（岡田・工藤・桑原ほか：1973、辻：1982・1984）や同窯跡群C地点第Ⅲ群土器（古川・太田：1993）に共通する点が多い。第Ⅲ群土器の年代は共伴する瓦の検討から天平11年（739）を前後する頃と考えられている（註2）。したがって、萱刈場窯跡群A地点SR2・3窯の年代は8世紀中葉頃に位置付けられる。

なお、SR3窯跡では再調整の施される壺とともにヘラ切り無調整の壺や高台壺が共伴している。壺は口径に対して器高の低い皿形を呈する。ヘラ切り無調整の皿形壺は多賀城市山王遺跡SD180B溝跡（千葉・石本：1991）・同遺跡SD2124溝跡第5層（後藤ほか：1994）をはじめ8世紀後半以降に一般的にみられるものである（註3）。このことから、萱刈場窯跡A地点SR3窯跡は8世紀中葉代の窯の中でも新しい様相を持っているといえよう。

（2）焼台と重ね焼きの方法について

SR2窯跡、SR3窯跡とも地下式窯である。窯のほぼ全体を調査したSR2は、燃焼部・焼成部とも床面が五枚あり、三次床面段階から側壁の補修も認められ、床面のかさ上げとともに側壁の補修を行いながら須恵器生産を続けている。

両窯とも焼成部の床面には製品を転用した焼台がみられる。器種としては壺・高台壺・壺蓋や甕の破片などがある。壺や高台壺は伏せた状態で置かれており、その設置を容易にするため半分もしくは一部を欠き、欠けた部分を斜面上方に向けたものが主体を占める。また、壺蓋はつまみを欠き内面を

上に向けて置かれている。坏の半次品を焼台に使用する例は、本窯跡と同時期の日の出山窯跡群C地点2号窯（古川・太田：1993）や松山町次橋窯跡1・2号窯跡（東北学院大学考古学研究部：1983）でも認められる。

SR2窯における焼台の設置状況をみると、五次床面では焼成部の下位に空白箇所がある。四次床面の場合は残存状況が悪いが、比較的残っている焼成部下位では中央の空白箇所を囲むように置かれている（第7図）。この空白箇所は甕などの大形品の窯詰め場所と考えられ、五次床面では火前に、四次床面では焼成部の中軸線上に大形品が並べられていたと思われる。こうした窯詰めの状況がよくわかる例が、日の出山窯跡群C地点2号窯の六次床面である（古川・太田：1993）。そこでは焼成部の中軸線上に空白箇所があり、坏などの製品転用焼台は空白箇所を囲む位置と側壁に沿うように置かれ、後者の上から生焼けの坏が正位の状態で出土している。以上のことから、甕などの大形品は火前や中軸線上に置き、その間や側壁沿いの空間に小形品を並べたと考えられる。大形品をメインにした配置は、天井の高さとの関係や高い焼成温度の必要性のほか、分焰柱のような火の廻りを良くする効果を意図したとの指摘がなされている（望月：1994）。

重ね焼きの方法については食膳具の場合、降灰状況の確認によってある程度の復元が可能である（註4）。坏ではID類の外面口縁部下に明瞭な痕跡と火襷が残っている（写真図版7-2・3）。前述の日の出山C2窯では製品が正位で出土していること、次橋窯跡の灰原出土品に3個重ねた例があることから（註5）、坏は同法量のものを口縁部を上に向けて柱状に積み上げたと考えられる（註6）。坏蓋は外面口縁部周辺、内面天井部付近に丸い痕跡が残る（写真図版7-11a・b）。前者はセットとなる高台坏・高台塊の口径、後者はその高台径と一致することから蓋を逆さにして高台坏や高台塊と重ね、それを1単位として柱状に重ねたと考えられる。

註

註1) 実測図でも手持ちヘラケズリと区別するため、砂粒の移動を示す表現は省いている。

註2) 第III群土器と共に伴する瓦は多賀城瓦分類の軒丸瓦230・231や軒平瓦660、またはそれらに使われた丸瓦や平瓦である。これらの軒瓦は平城宮瓦分類の軒丸瓦6282や軒平瓦6721と文様が酷似しており、その系譜を引くと考えられている（伊東：1956）。平城宮におけるこの種の瓦は、「二条大路木簡」との共伴関係から天平8～10年（736～738）に実年代の一端が求められている（佐川：1990）。

註3) SD180Bでは漆紙文書で天平宝字7年（763）の「具注曆」断簡が出土している（平川：1992）。「具注曆」断簡は、暦として使用されたのち紙背を利用して文書が書かれており、漆容器のフタ紙として利用されるのはそのあとになる。

註4) 重ね焼きの方法については北野（1988）に詳しく記されており、これを参考にした。

註5) 次橋窯跡報告書の写真図版21-6に示されている。

註6) 河南町須江窯跡群関ノ入地区では、9世紀後半代の須恵器坏の重ね焼きの状況が確認されている。そこでは完形品を含む坏を伏せた状態で置いて焼台とし、この上に製品の坏を口縁部を下に向けて柱状に積み上げたと考えられている（佐藤敏幸氏の教示による）。8世紀中葉の方法とは重ね方が逆であり、8世紀後半から9世紀後半代の間で重ね焼きの方法が変化している。